論文の内容の要旨

論文題目　　学部ゼミナールにおける汎用的技能の習得に関する研究
－探究と相互作用を基盤とする共同体的な学習環境－

氏名　　伏木田 稚子

本論文は、図 1 に示すように 5 章から構成されている。はじめに 1 章では、「ゼミナールは大学教育においてどのような点で重要なのか」という問いに答える形で、社会的な背景を論じた。具体的には、卒業後に必要な力や大学への要請が大きく変化し、授業のあり方に主体性や能動性が色濃く求められるようになる過程で、アクティブラーニングと総称されるさまざまな授業スタイルに注目が集まっていることを取り上げた。その中でゼミナールは、「少人数での対話を通じた共同体的な学習環境」として揺らがない価値を有しており、そのことにあらためて目を向ける大切さと意義を訴えた。

続く 2 章では、「なぜ俯瞰的なゼミナール研究を行う必要があるのか」という問いについて、理論的な背景をまとめた。ゼミナールに関する先行研究については、その多様性や密室性を理由に、包括的な視点を有した実証研究が不足している。ゆえに、ゼミナールでの学びとそれを支える授業構成を検討することは、ゼミナールでの汎用的技能の成長を裏付けるだけでなく、「ゼミ」らしさを再定義し、ひとりひとりの教員が改善や充実を図るための素地になると考えた。

そして 3 章では、学生によるゼミナールでの学習経験の評価という視点から、ゼミナールにおける学習者要因 (受講動機、学習意欲) 、学習環境の客観的側面 (活動、教員による指導) 、学習環境の主観的側面 (教員に対する評価、共同体意識) 、学習成果 (汎用的技能の成長実感、充実度) の関係を検討し、4 章では教員によるゼミナールの授業過程の評価という視点から、学習意欲の喚起を介して汎用的技能の成長実感を高めるゼミナールの授業構成について、その特徴を明らかにした。なお、3 章は「学部 3，4 年生を対象としたゼミナールにおける学習者要因・学習環境・学習成果の関係 (伏木田ら 2011) 」に、4 章は「教員による学部ゼミナールの授業構成－

学生の特性把握・目標の設定・活動と指導－ (伏木田ら 2013) 」、「学部ゼミナールの授業構成が学生の汎用的技能の成長実感に与える影響 (伏木田ら 2014) 」として学術雑誌に掲載済みである。

最後の 5 章では、学生によるゼミナールでの学習経験の評価 (研究 1) および、教員によるゼミナールの授業過程の評価 (研究 2) を受けて、転用可能な技能の成長を支えるゼミナールのあり方について考察した。教員－学生間の密なかかわり、主体性を引き出す学習活動、多様性を認めるまなざしが重要な役割を果たしていること、ゼミナールは数多の困難を内包しながらも、大学教育の礎としてこれから先も役割を果たし続けるだろうという展望を示して論を閉じた。

なお、本論文で用いる主な用語と概念には、「ゼミナール」と「汎用的技能」の 2 つが挙げられる。まず、ゼミナールとは講義と並ぶ授業形態のひとつであり、教員と学生によって構成される共同体としての意味も持つ。扱われる内容やテーマには教員の専門性が反映されていることが多く、研究のプロセスを基盤とした探究によって多くの活動が構成されている。基本的には、教員と少人数の学生が円座またはグループごとに座り、各自の研究やグループワークの進捗報告、文献の輪読や購読などを通じて、専門的な学問分野への理解を深めていくことが求められる。そして、汎用的技能は本論文中では「基礎的で転用可能な技能」という語と同義で用いられ、卒業後の社会人生活においても役に立つことを前提としている。対人関係、問題解決、母語によるコミュニケーション、市民生活など、あらゆる場面で共通して求められる能力全般を指し、generic skills、core skills、key competencies など呼称は統一されていない。

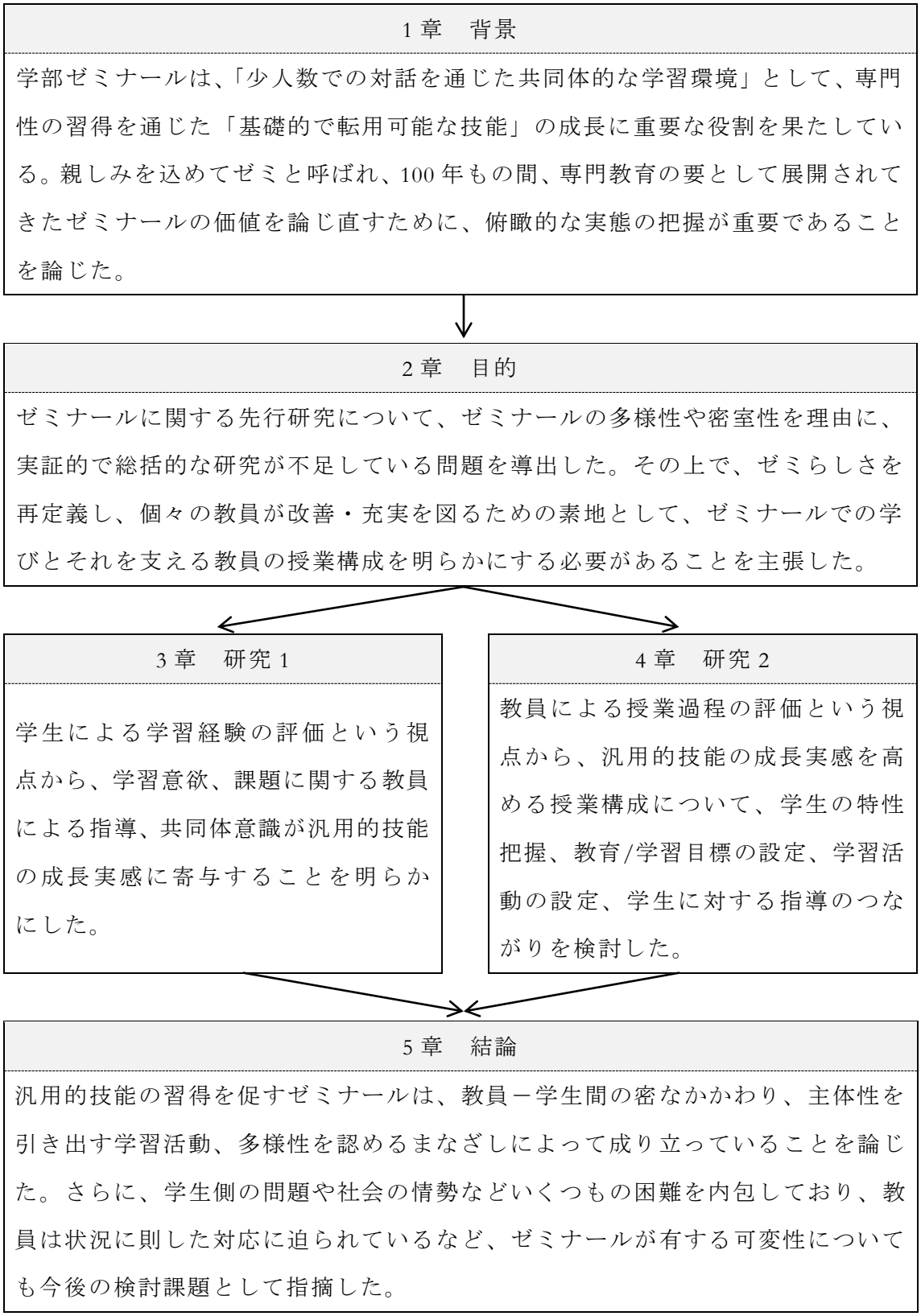

1章　背景
学部ゼミナールは、「少人数での対話を通じた共同体的な学習環境」として、専門性の習得を通じた「基礎的で転用可能な技能」の成長に重要な役割を果たしている。親しみを込めてゼミと呼ばれ、100年もの間、専門教育の要として展開されてきたゼミナールの価値を論じ直すために、俯瞰的な実態の把握が重要であることを論じた。
2章　目的
ゼミナールに関する先行研究について、ゼミナールの多様性や密室性を理由に、実証的で総括的な研究が不足している問題を導出した。その上で、ゼミらしさを再定義し、個々の教員が改善・充実を図るための素地として、ゼミナールでの学びとそれを支える教員の授業構成を明らかにする必要があることを主張した。
3章　研究1
学生による学習経験の評価という視点から、学習意欲、課題に関する教員による指導、共同体意識が汎用的技能の成長実感に寄与することを明らかにした。
4章　研究2
教員による授業過程の評価という視点から、汎用的技能の成長実感を高める授業構成について、学生の特性把握、教育/学習目標の設定、学習活動の設定、学生に対する指導のつながりを検討した。
5章　結論
汎用的技能の習得を促すゼミナールは、教員－学生間の密なかかわり、主体性を引き出す学習活動、多様性を認めるまなざしによって成り立っていることを論じた。さらに、学生側の問題や社会の情勢などいくつもの困難を内包しており、教員は状況に則した対応に迫られているなど、ゼミナールが有する可変性についても今後の検討課題として指摘した。

図 1.　本論文の構造